

# 高校生が国内に居ながらにしてできる国際交流

静岡文化芸術大学 文化政策学部 叢ゼミ（研究室）

指導教員：叢日超

参加学生：井上綾菜、木戸ゆめ、林葵生

福田有桂、戸田響、原理純、本田颯都

## 1 要約

本研究では、外国人留学生を受け入れる環境に関して受け入れ先の確保や支援員の増員等の取り組みを検討し、高校生と留学生の交流プログラムの企画支援とその効果を評価した。具体的に、静岡県立浜松湖東高校および静岡文化芸術大学の学生にアンケートを実施し、国際交流への意識や支援員としての参加意欲を調査した。また、静岡国際交流協会へのインタビューにより、支援員の現状と課題を把握した。さらに、ホストファミリーの特徴を調査するため日本AFS協会静岡支部、留学生と高校生の交流意欲を調査するため浜松日本語学院へのインタビューを行った。

## 2 研究の目的

本研究の目的は、海外渡航に頼らずとも高校生が異文化と触れ合う機会を広げるために、地域の学校が外国人留学生を受け入れる際に必要となる条件や支援体制を明らかにすることである。近年、円安や物価上昇により留学費用の負担が増しているため、国内の留学生との交流は国内に居ながら海外文化に触れられる貴重な機会である。しかし学校現場では、受け入れ体制の未整備やホストファミリー不足などの課題がある。そこで本研究では、①ホストファミリー等ボランティアを増やすための広報方法、②支援員を確保・育成するための決定因子と募集方法、③高校・大学間の交流プログラムの企画案を検討し、地域での持続可能な受け入れ体制の構築に向けた実践的な提案を行い、課題の解決を図る。

## 3 研究の内容

### (1) 当初の計画

①外国人留学生を受入れる際に、必要となるボランティア（ホストファミリーほか、留学生の活動を支援する人・団体等）を増やすための広報等の取組の検討。具体的に、関連団体や個人等に対して宣伝資料の配布やネット上の情報発信などを試み、効果的な手段を見出す。

②高校に通学する留学生に対し、留学生やホストスクール、ホストファミリーと連絡を取りながら必要な助言や支援を行う支援員を増やすための広報等の取組の検討。具体的に、支援員になる理由について既存の支援員にヒアリングをし、個人属性などを加えて支援員になる決定因子を選出する。英語による交流ができる大学生や定年者等を対象として支援員になる意向調査を行い、支援員の増員できる方策を洗い出す。

③高校及び大学が受け入れている留学生との相互交流（高校、大学への訪問や体験授業等）や異文化理解等の企画。具体的に、受け入れがないが寮のある高校に対して、体験授業や交流プログラムなどへの開催と学生への参加誘致、高校生を大学のオープンキャンパスへの参加を誘致して交流を促す。参加者に対してアンケート調査をし、国際交流活動の効果を測る。

### (2) 実際の内容

実施日/期間	実施内容
2025年10月30日	静岡県内の留学生支援を行う静岡県国際交流協会にインタビューを行った。
2025年12月4日～12日	留学生受入のある静岡県立浜松湖東高校の全生徒に対してアンケートを行い、国際意識や留学生との交流イベント等について、オンラインと紙面回答によって調査した。有効回答が412名であり、回収率は53.5%である。
2025年12月17日	静岡文化芸術大学の大学生に対し、オンライン形式のアンケートを実

～31日	施し、支援員になる意欲を高める要因等を分析した。有効回答は86名であった。
2026年1月23日	日本でホストファミリー募集や留学生の支援ボランティアを行っているAFS日本協会の静岡支部にインタビューを行った。
2026年1月26日	浜松日本語学院の職員に対して、高校生との国際交流イベントの参加意欲についてインタビューを実施した。

B…一部修正

インタビューやアンケートの実施にあたり、協力先との日程調整に想定以上の時間を要した。実施時期の調整が難航し、当初のスケジュール内で全ての調査を完了することが困難になったため、計画の見直しを行った。

#### 4 研究の成果・課題と対策

計画①について

##### ●静岡国際交流協会へのインタビューから

静岡県国際交流協会は、留学生の就職支援や親善活動を行っている団体である。この団体では外国語ボランティアを募っており、業務内容はデーキャンプや留学生イベント時の通訳等である。このボランティアの募集は公式HPで行っているが、1000名を超える応募者がおり、また、国際交流活動は学校から依頼を受けて行うものであり、具体的には協会が募集した親善大使との文化交流である。この依頼は学校への広報によって受けているものであるが、活動への認知度が低く依頼が少ないことが課題である。しかし、10校程度で活動を行った経験もあり、学校からの需要は高いと推察できる。

##### ●日本AFS協会静岡支部へのインタビューから

インタビューを通じてホストファミリーになる家庭は子育て世代が多く、募集はInstagramがメインであるとわかった。この結果から、若年層へのアプローチはSNSの利用が効果的であると考えられる。また、浜松湖東高校へのアンケート結果と同じく、AFS協会で募集されるホストファミリーの家庭も、子どもの語学力の向上といった国際意識の高い家庭が多いことがわかった。また、ホストファミリーは短期契約が多く、継続して実施する家庭は少ない。ホストファミリーを継続する家庭には留学生に対して気軽に対応する傾向があり、継続しない家庭は留学生をお客様として対応する傾向があるとわかった。留学生の受け入れを負担としないためには、ホストファミリーになるうえでの意識づくりが必要だと考えられる。

計画②について

##### ●静岡文化芸術大学の大学生に対するアンケート調査から

本校を対象とした理由としては、国際文化学科があり国際関係に興味のある学生が多いと考えたからだ。支援員として活動に参加できる時間を確保できると考えられる大学生を対象に、募集の参考とするためのアンケート調査を行った。なお、今回のアンケートでは留学生の支援員とは「留学生の悩みや困りごとを聞いて、学校やホストファミリーに伝える“橋渡し”の役割や、普段の生活をサポートする仕事のこと」と定義した。アンケート結果は以下のとおりである。

「留学生や外国人と関わることに興味があるか」の質問に関して、「ある」と答えた人が61名であり、「ない」と答えた人が25名であった。また、「これまでに、留学生や外国人と関わったことがあるか」に関する回答は「ある」が65名であり、「ない」が21名だった。このことから、留学生や外国人と関わる経験は彼らへの関心に影響していると考えられる。そして、「将来、国際関係や外国語を扱う職業に就きたいと考えているか」に関する回答は、「はい」が37名であり、「いいえ」が49名であった。

「留学生の支援員になることに興味があるか」の質問に関して、「ある」と回答した人が24名であり、「ない」が62名であった。そして、「ない」と回答した人が支援員になりたくないとする理由（複数選択可）も聞いた。図1に示すように、留学生の支援員の不足には、外国語を扱うという点が障壁になっていると考えられる。そして、「支援員とい

う仕事にどのような支援が欲しいか」（自由記述）については、「研修の充実さ」や「語学のサポート」に関するものが多かった。また、支援員になることを想定した質問では、「週当たり何時間活動が可能か」について、「1時間以上3時間未満」との回答数（37名）が最多であり、「どのくらいの報酬が欲しいか」については、「ボランティアとして参加できる」が18名であり、「静岡県最低賃金（1092円）」が47名であった。

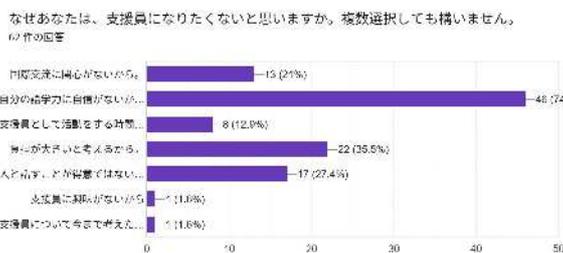


図 1

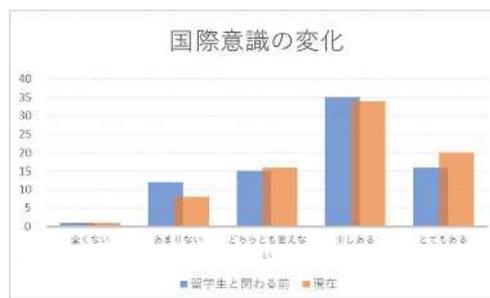


図 2

この結果から、大学で留学生の支援員を募集する場合は学生が感じている不安を軽減し、参加のハードルを下げる工夫が必要であると考えられる。例えば、研修制度の充実を明確に提示することが必要である。「支援員になりたくない」と考える人の中には自分の語学力を懸念している人が多く、語学サポートを入れることで参加意欲の向上が期待できる。また、募集方法として、大学生を対象とする場合は、大学の広報や大学での交流イベント実施の際の募集が効果的だと考える。

計画③について、

●留学生受入のある静岡県立浜松湖東高校の学生に対するアンケート調査から

留学生と関わる効果を図ることを目的として、2025年度1学期にスイス出身の留学生が在籍していた本校の生徒に対してアンケートを実施し、クロス集計を通じて留学生との交流経験の有無による国際意識の変化やホストファミリーへの関心度等を分析した。

回答者のうち、留学生と交流経験のある学生は79名である。留学生と関わった人に対して「留学生と関わる前、外国や異文化への興味関心はどれくらいか」と「現在、外国や異文化にどれくらい興味関心があるか」といった質問の集計結果が図2に示す。交流経験者は留学生と関わる前後で外国や異文化への興味関心は増していることがわかった。

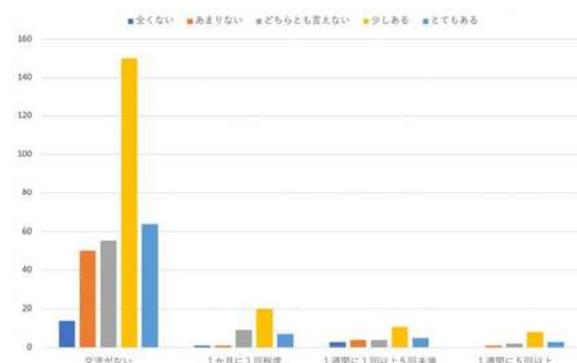


図 3

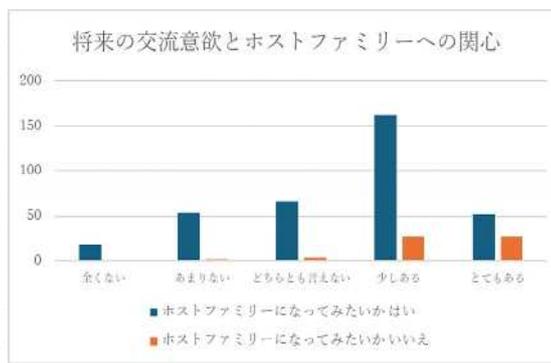
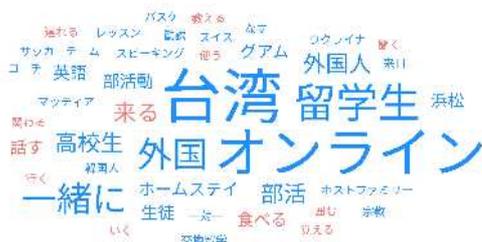


図 4

留学生との交流経験と将来の交流意欲をクロス集計した結果が図3に示す。留学生との交流頻度が高い人のほうが、将来の国際交流意欲が「とてもある」の割合が高いことがわかった。だが、留学生との交流経験がなくても将来の国際交流意欲の高い生徒の割合は高いため、留学生との交流の機会を増やす必要があると考えられる。また、将来の国際交流意欲とホストファミリーへの興味をクロス集計した結果が図4に示す。この結果から、将来の国際交流意欲の高い人ほどホストファミリーへの興味が高いことがわかった。

「これまでに参加し、印象に残っている国際交流活動は何か。（自由記述）」の回答結果を基に、AIテキストマイニングで抽出を行った。図5に示すように、以前に来校した留学生との交流や授業でのオンライン交流経験が生徒の印象に残っていることがわかった。



しかし、これらの活動は受動的なものであり生徒の主体的な参加は少ないことがわかった。そして、「どのような国際交流イベントに参加したいか」（複数選択可）という質問では、「外国人と一緒にチームスポーツをする」201件、「外国人と一緒に料理をつくる」171件、外国人と異文化（伝統衣装・音楽・ダンス等）を体験する」146件が多く回答を得た。

図5

● 浜松日本語学院へのインタビューから

日本語学院に在籍する留学生は日本人と関わる機会が少なく、国際交流活動への参加意欲が高いことがわかった。また、浜松日本語学院でスポーツや対話による活動を実施しており、留学生から高い評価を得ていた。このような活動は気軽に実施でき、高校生の参加意欲も高いと考えられる。

## 5 課題提出者・地域への提言

本調査及び分析の結果から以下のことを提案する。

ホストファミリー等ボランティア募集は国際交流意欲の高い層が効果的である。子育て世代を対象として募集する場合は、SNSによる広報が効果的である。しかし、ホストファミリーに興味のある層は少ないため、興味のない層に向けたイベントを企画し、国際交流に興味を持たせる必要がある。ホストファミリーになるうえで、心身の負担とならないよう研修や意識づくりをする必要がある。生徒は主体的に国際交流活動にしづらいために、国際意識の低い生徒でも参加しやすい低ハードルの交流機会を作るべきである。支援員の確保には語学サポートや研修を充実させ、週数時間と手軽に始められる業務で募集すれば、大学生の参加が見込める。

## 6 課題提出者・地域からの評価

海外からの留学生の受入れは、本県高校生が在籍する高等学校に居ながら国際交流ができる一つの手段である。また、留学生との学校生活は、高校生・教職員にとって異なる文化や背景を知り多様な価値観に触れることのできる貴重な機会となっているが、一部の学校で留学生の受入事例があるものの、国際交流を推進していくには受入れ環境を整備することが課題であると感じていた。

本研究では、課題となっている留学生を受入れる際に必要となる条件や支援体制についてのアンケート及びインタビューの実施により、受入れに必要なボランティアや支援員を増やすためには、交流経験を通じて意欲を高めることが重要であることを明らかにしている。

また、国際交流機会創出については、気軽に参加できるイベントを通じて国際交流に興味のない層に向けた企画が重要であることの提案を行っている。広報についてはSNSの活用を検討し、若者の目線で提案を行っていることから、今後の国際交流の推進の広報への活用が期待できる。

県立高校では、留学生の受入れに関心があるものの「感覚的にハードルが高い」という認識から受入校が限定されている状況であるため、現在県立学校向けの留学生受入マニュアルを作成中である。本研究で、「大学で留学生の支援員を募集する場合は学生が感じている不安を軽減し、参加のハードルを下げる工夫が必要である。」と言及されているため、マニュアル作成においてはこの点を意識したい。

本研究を大いに参考にし、国際交流の更なる推進を目指していく。（静岡県教育委員会教育政策課）